

# 劍卷の成立背景

——熱田系神話の再検討と刀劍伝書の世界——

渡瀬淳子

はじめに

「平家物語」屋代本などに付属する系統の「劍卷」<sup>(1)</sup>は、古くは「平家物語」内部の「劍」の章段が増補改定を繰り返すなかで生じてきたとされていた。昭和五五年に発表された伊藤正義氏の「熱田の深秘」<sup>(2)</sup>で、劍卷と「あつたのしむひ」との類似が指摘されると、劍卷は「熱田系神話」との関わりが深いと言われるようになった。以来、劍卷は中世日本紀との関わりから論じられる傾向にある。

本論は、従来の中世日本紀からの論について、「熱田系神話」なるものの再検討の必要性を提起し、中世日本紀以外の、劍卷の成立に影響を与えた文化的背景について述べるものである。

## 一、「熱田系神話」の再検討

先にも挙げた伊藤正義氏の論では劍卷について「これは平家物語の中で増補を繰り返した結果として生れて来たというようなも

のではなく、その部分をそっくり熱田系のテキストを借用した結果であると考える方が自然であろう。」と述べている。ここで問題なのは「熱田系テキスト」の定義づけがなされておらず、それが「熱田神宮内部で作成されたもの」を指すとも「熱田神宮に關わる内容のもの」を指すともとれてしまうことである。

### 「尾張国熱田太神宮縁起」との比較から

熱田神宮については現在多くの伝承がのこされているが、それぞれの内容が同じ性質のものであるとは言い難い。中でも最も古いと縁起とされる「尾張国熱田太神宮縁起」と、劍卷と関係の深いと言われる「あつたのしむひ」では、似た内容の物語を扱っていても、その性質は全く異なっている。例えば、新羅の沙門道行が宝劍を盗んで新羅に持ち帰ろうとして失敗するという話が両者に共通してあるが、その話の扱いが両者では全く異なっている。

「尾張国熱田太神宮縁起」<sup>(3)</sup>（鎌倉初期頃成立か）では

天命開別天皇七年、新羅沙門道行盜劍神、為移本国、竊析

神社、所劍裏袈裟、逃去伊勢國、一宿之間、脱自袈裟、還著本社、道行更亦還到、練禪禱請、又裏袈裟、逃到撰津國、自難波津解纜帰國、海中失度、更亦漂着難波津、乃或人託宣云、吾是熱田劍神也、而被欺野僧、殆着新羅、初裏七條袈裟、脱出還社、後裏九條袈裟、其難解脫、于時吏民驚愕、東西認求、道行中心作念、若棄此劍、將免投擲之責、則拋棄神劍、神劍不離身、道行術盡力窮、挥手自肯、遂當斬刑、と、道行の話はそれ自体で完結し、この盜難事件は熱田明神の神威を示す話として扱われている。これが「あつたのしむひ」になると、道行が住吉明神に誅された後、以下のように物語が発展してゆく。

……しんらのみかと、つるきをはとりへすして、たうきやうをはころしたまへぬ、はらをた、せ給ひて、てんちくよりしやうしんの七ふとうを、いのりくたして、日ほんこく、をしよせ、あつたみやうしんを、うちまいらせんとし給ふとき、みやうしん、このよしを、てんせう大しんへ、申させ給ふ、ちからをあはすへしとて、九萬八千のいくさかみをもつて、御た、かいありしかは、大みやうしんよるこひ給ひて、さて、七ふとうをうはひとり、七ふとうけんともとのけんにあひそへ、八けんのみやうしんと、ゆわ、れ給ふ  
同じように劍巻でも、

……新羅ノ御門、馮給ツル道行ハ討レケリ、安カラヌ事ニ思食テ、不動ト云將軍ニ、七ノ劍ヲ作り持セリ、日本ニ渡シ給フ。生不動ハ尾張ノ國マテ飛下ルヲ、熱田ノ明神、「悪キ者

哉」トテ、斃テ賊害シ給ヘリ。持所ノ七ノ劍ヲ召取給テ、草薙ノ劍ニ加テ同宝殿ニ祝ハレタリ。今ノ八劍ノ大明神、是也。

となつており、ここでは道行による盜難事件が熱田神宮の撰社である八劍宮の縁起へとつながっていく傾向がみられる。こうしたことから劍巻が熱田系テキストを取り込んでいると言われるのだが、この傾向は時代的なものというよりは、伝承がどこで作成されたか、ということと関わりが深いようである。もともと早く八劍宮と道行の説話を結びつけた文献は伊勢神道の神道書「伊勢二所太神宮神名秘書」(二二八五年)であり、

其草薙劍今在尾張國熱田社也。沙門道行盜取之。赴異國。逢風雨不達先路。有靈威被送熱田社。自爾以降。造加於劍七柄為八劍宮也。

ここでははつきりと八劍宮の起源と道行による劍の盜難を結び付ける「あつたのしむひ」や劍巻と同じ性格の記述がみられる。しかし、熱田神宮で作られたと思われる「熱田太神宮御鎮座次第」(延暦十年の奥書有)では

天命開別天皇七年十一月外賤逃宮路山到筑紫時大神靈驗賜國司女於是奉遷大神

とあるだけである。同じく「宝劍御事」(応永四年の奥書あり)でも、道行が日本へ渡り、日本の神々を水瓶に閉じ込めた上で宝劍を盗み取るが、熱田明神が内裏に託宣を下し、無事宝劍が取り戻されるという話があり、その末尾は以下のようになっている。

……内裏院中驚思食、貴僧百人難波浦被下、大般若経七日被

読誦、勅使筑紫被立、七日満日、劍七帖袈裟蹴破出様道行之  
頸切落、劍緒高松之梢懸、皓渡御坐ケレハ、在地之者奉拜  
之、早馬立、令奏聞ケレハ、貴僧十人被下、劍可入給程箱  
指、且之上置奉祈ケレハ、劍自然彼箱飛入給ケリ、仍都奉入  
ケレハ、遠国御坐社有此御事、洛中御在所造可崇奉有沙汰ケ  
レハ、内侍付給、我有東土縁、如元熱田之社可帰有御託宣ケ  
レハ、此上者將、熱田奉帰入ケリ、  
ここでもやはり「尾張国熱田太神宮縁起」と同じように八劍宮  
と道行を結びつける記述はみられない。他にも熱田には「熱田太  
神宮秘密百録」などがあるが、それでも八劍宮と道行の結びつき  
はみられないのである。

#### 室町期の展開

室町時代に入ると熱田にまつわる伝承は謡曲の題材ともなつて  
いる。金春禅竹作とされる「源大夫」<sup>9)</sup>は、勅使に社の由来を尋ね  
られた老夫婦が御神体である宝剣の故事を語り、自分達が脚摩  
乳・手摩乳であることを告げ、さらに脚摩乳が源大夫であり、ま  
た、その源大夫は橘姫の父であるとあかすという内容になつてい  
る。語られる故事は素盞烏尊のオロチ退治と日本武尊の東征を合  
わせたもので、劍巻の類話とも言えるが、源大夫を橘姫の父とす  
るなど異なる点が多い。この謡曲のシテである源大夫は、劍巻・  
「あつたのしむひ」などには登場するが「尾張国熱田太神宮縁  
起」には登場しない人物である。世阿弥の能には「布留」という  
曲があり、そのなかに「そのかみ熱田の宝剣は、道行法師が法味

に引かれて、筑紫まで出現ありしぞかし／それは異国の行人なれ  
ば、さも法力も高かるべし」というやりとりがある。「布留」の  
こうした言説は、劍巻などとは違った形での、聖人としての道行  
の伝承を取り込んでいるという点で「熱田宮秘釈見聞」に「……  
大唐新羅国ニテ道行聖人ノ書給ヘル梵網経、神ノ御財トテ有マ  
ス、弘法大師ハ十三生人、新羅道行ト者、弘法大師化身也、」と  
あるのに近い。このようにみていくと、熱田にまつわる伝承の裾  
野の広さが想像できる。しかし、御伽草子や謡曲などに翻案さ  
れ、ひろく享受された伝承は「尾張国熱田太神宮縁起」をはじめ  
とする、熱田社で作成されたとされる伝承とは性格が違うのであ  
る。

また、劍巻で、草薙劍と同一視される熱田明神が、道行の袈裟  
を破つて逃げようとする話は「筥崎宮紀」<sup>10)</sup>（大江匡房作）に「熱田  
明神、此為劍出自印契中欲逃去、僧以袈裟被劍、収之後諸神訖、  
欲取宇佐宮、而炳然昇天、咒力不及、僧到山陽道、於備後国、為  
宇佐宮被蹴而死、……」とあるのによく似ている。住吉明神の活  
躍が描かれる点などもあわせて、八幡縁起の影響があるのでは  
ないだろうか。

八劍宮は古くからその存在を知られた熱田神宮の摂社であり、  
「熱田明神講式」<sup>11)</sup>（一六〇一六五年頃）には以下のようにその名  
がみえる。

次八劍大明神者、昔素盞烏尊載大蛇八岐尾、所得神劍也、故  
号八劍、

八劍宮は熱田社と同じく剣を祭る神社であるため、古来その伝

承が混乱しがちであったようだ。その他に『梁塵秘抄』巻第二、四句神歌<sup>14</sup>にも

関より東の軍神、鹿島 鹿取 諏訪の宮 また比良の明神、

安房の洲 滝の口や 小□、熱田に八剣 伊勢には多度の宮とあるのがみえる。しかし、これらのものからは八剣宮についての固有の伝承を知ることができない。八剣宮についての記述は日本書紀の注釈書などにはあらわれず、剣巻や「あつたのしむひ」系列の、道行説話と結びついた形の伝承が広く確認できるようになるのは、室町にはいつてからである。「兼邦百首歌抄」(文明一八年)<sup>15</sup>「参詣物語」(山田大路元長 文明一三年)などに、道行説話と結びついた八剣宮の伝承が記されている。

よって、以上のように道行説話と八剣宮の縁起を結びつける傾向は熱田社外部のものであった可能性が強い。「あつたのしむひ」は御伽草子であり、必ずしも熱田社で作成されたと考える必要はないであろう。むしろ熱田社の縁起と性格を異にする「あつたのしむひ」が、剣巻の影響を受けて成り立っている可能性も考えられるのである。

例えば、『尾張国熱田太神宮縁起』には縁起独自の記述とされる部分があるのだが、剣巻や「あつたのしむひ」にはそれが出てこない。独自の部分とされているのは尾張連の祖とされる稲種公についての記事である。東夷討伐のさい「天皇勅吉備武彦与建稲種公、服従倭武尊」とあるのに始まり、日本武尊が尾張国で稲種公の歓待を受けたこと、その妹宮酢姫を娶ったこと、遠征の帰りに再び尾張を訪れると稲種公の死を告げられること、など、数箇

所にわたりあらわれ、縁起の重要な部分を形作っている伝説であるにもかかわらず、その名は剣巻には現れない。たとえば、遠征の途中尾張にたちよったところでは

尾張国二下テ、マツコノ島ト云所ニテ、源大夫ト云者ノ家ニ留マリ、源大夫カ最愛ノ姫アリ。岩戸姫ト云ヘリ。ミメ形吉カリケレハ、日本武尊是ヲ始メテアヒ給フ。一夜ノ契リ深クシテ志不浅。

とあり、稲種公は現れない。その代わりをするのが「源大夫」であり、稲種公の妹宮酢姫の代わりに源大夫の娘岩戸姫となっている。また、『尾張国熱田太神宮縁起』では熱田に宝剣が奉斎される部分で、

日本武尊奄忽仙化之後、宮酢姫不違平生之約、独守御床安置神劍、光彩垂日、靈驗著聞、若有禱請之人、感心同於影響、於是、宮酢姫会集親旧、相議曰、我身衰耗、昏曉難期事、須未暝之前占社奉遷劍神、……

とあり、宮酢姫が宝剣を奉斎し、社を建てて祭ったことが書かれるが、これは熱田社の独自の記述であると同時に、神社の起源に関わる重要な部分である。剣巻ではそれが

……草薙ノ劍ヲハ、遠ノ柱ニ懸置給シテ、岩戸姫乞給ヒテ、紀大夫カ田一夜ノ内ニ森ト成リタリシヲ、其森ノ杉ニ寄懸テ被置タリケルカ、ヨナノ劍ヨリ光リ立出ケルカ、彼杉ニ燃付テ焼ニケリ。田ニ彼杉ノ焼テ倒タリケレハ、焼田ト申ケル。又彼杉ノ焼テ倒レ入タリシ時ハ、田モ熱クヤアリケント云心ニテ、熱田トハ名付タリ。日本武尊ハ、白鳥ニテ松子ノ

鳥二飛落給テ、後二ハ神ト祝レ給ヘリ。今ノ熱田大明神、是也。岩戸姫モアカテ別シ中ナレハ、終ニ神ト頭テ、一所ニ祝ハレ給ケリ。源大夫モ、神トナリ、田作りノ紀大夫モ、同ク神トソ祝ハレケル。

となり、岩戸姫が奉斎していたのかどうかすらはつきりとは書かれず、日本武尊に関わった者達が神として祭られたと書かれるのみである。稲種公は熱田大宮司家の祖とされる人物で、熱田社にとつては重要人物であろう。そうした人物を伝承から外してしまふことは熱田社で作成されたものとしてはありえないのではないか。

もし、剣巻が熱田神話の影響を受けて成り立っている、あるいは熱田系のテキストから本文を直接借用しているのだとすれば、自らのオリジナリティーが表れている稲種公の記事や宮酢姫による宝剣奉斎などを割愛するのは不自然であり、そうした点からも「熱田系」という言葉の定義や、熱田の神話と剣巻の関係は見直される必要があると思われる。

## 二、刀剣伝承の流行

剣巻が成立してくる背景には、神祇説の影響よりむしろ刀剣に対する興味関心の盛り上がりがあるのではないだろうか。刀剣についての伝承は鎌倉時代頃からみられるが、南北朝以降室町時代にかけて大流行する。それは「保元物語」「平治物語」「太平記」などの軍記だけでなく、公家日記にも刀剣の伝承を記録した記事がみられることから推測できるのである。主な日記を散見して

も以下のような記事をみることができ。

・「実隆公記」延徳二年十一月四日に左相府の重代の太刀「千鳥」の号の由来<sup>(17)</sup>

・「藤涼軒日録」長享三年正月晦日に吉見家重代の太刀「鶺鴒」についての伝承<sup>(18)</sup>

・「看聞御記」応永二十八年の紙背文書（物語目録）に「鬚切物語 一卷」の記録<sup>(19)</sup>

・「看聞御記」永享八年十二月十日に「天狗切」という太刀についての記述<sup>(20)</sup>

こうした現象の背景には鎌倉後期から刀剣に銘が刻まれ始めたことがあるだろう。「増鏡」には後鳥羽院の刀剣鑑定に関する話が出てくることから、刀剣についてその銘によつて優劣を判定する習慣がうまれていたことがわかる。世俗の一般的知識を集めた往来物の一つである「新札往来」(康暦二年)には

太刀刀之身、昔之天国以後、得其名鍛冶、雖單數百人ニ、紀

新大夫舞草・中比後鳥羽院ノ番鍛冶・御製作者、以菊為銘。

此外、粟田口・藤林・国吉・吉光以下又三條小鍛冶・了戒・

定秀・千手院・尻懸・一文字・仲次郎。此等ハ大略其振舞如

ク劍ノ候。御所持候者、少々可拝領ス候。

と、当時の名のある鍛冶が列挙されている。

そうしたなかで、「刀剣伝書」<sup>(23)</sup>といわれる一群の書物がつくられてくるのであるが、それらの中には刀剣の鑑定法のみならず、刀工やその刀剣についての伝説など幅広い情報を集めたものがあった。例えば「鍛冶名字考」<sup>(24)</sup>(享徳元年(一四三二年)の奥書有)

の、「伯耆国住鍛冶等」の項の「実次」という鍛冶についての記述をみてみると以下のようにある。

号伯耆権守ト。天武天皇ノ御宇、慶雲年中ノ作也。此作ノ太刀、源氏伊与守帯之。子息筑後守、是ヲツタエ畢。嫡子八幡太郎コレヲ伝タリ。コ、ニ後冷泉天皇ノ御宇天喜年中ニ、奥州五十四郡・出羽国十二郡管領ノ時、安倍ノ貞任・宗任ツイハツノタメニ、義家八万騎ニテ相向。十二年ノ合戦ニ、奥州金崎クリヤ河ノ城セメヲトシ、貞任召取テ頸ヲキリスヘテ、アマル太刀ニテヒケヲキリ落シケル間、ヒケキリト名付タリ。又奥州舞草行重作太刀相ソヘテ、ニ振御ヒサウニ思食ケリ。彼ノ実次ハ、行重ヨリ寸法一寸ハカリ短シ。行重ハ、寸法長間、ナヲスクレテ御ヒサウアリ。アル日、義家、ニフリノ<sup>本方カ</sup>立ナラヘテ置給タリケリカレトモ、サヤツカヨリサキ一寸ハカリキラレ、同シ長ニナリニケリ。其ノ時ヒケケリヲ友キリト名付給ウ。又行重ヲハサヤツカニサシヲキ給テ後ニヌキテ見給ヘハ、元ヨリナヲイツクシク、寸法モトノコトクニ生ノヒタリ。其時彼ノ行重ヲ若草ト名付給フ。義家イヨ<sup>ク</sup>ニフリノ太刀御ヒサウ也。子息六条ノ判官為義コレヲ伝給ウ。其ノ子下野ノ守義朝コレヲ伝。友切ヲハ頼朝是ヲ伝。子息実友伝之。其後相模ノ守義時伝テ、合戦ノ時セウマウニヤキケルヲ、陸奥守時頼、此太刀ヲ行次ニヤカセテ有ケルヲ相模ノ守貞時出家シテ、西明寺禪門崇演許渡進タリケルヲ、法華堂ニ彼ク納メタリ。又此作ノ太刀陸奥守宗宣一フリ

帯之。此作ノ太刀三十振我カ朝ニアルヘシ。

ここに書かれた話は直接に特定の文学作品と比較検討が可能な種類のものではない。しかし内容は剣巻や『曾我物語』流布本、幸若の「劍讚嘆」などと類似しており、おそらく巷間に流布していた異伝の一つであろう。刀剣伝書はこのような異伝を含むものでもある。

刀剣伝書がこのように鍛冶や刀剣にまつわる伝承を述べることは、興味関心の充足のほかに、鍛冶やその作刀に価値を付与する意味もあつただろう。こうした性格をもつ刀剣伝書は文学作品にも影響を与えていた形跡がある。『平治物語』の鬚切の伝承をみると、古態とされる陽明文庫本には鬚切伝承そのものが存在しないが、金刀比羅本「源氏勢汰への事」になると、以下のようにみえる。

……白星の甲の緒をしめて、鬚切といふ太刀を帯、八幡殿奥州にて貞任を責られし時、度々の間に生取千人の首をうち、ひげながら切てんげれば、鬚切とはなづけたり。鎧に産切、太刀にひげきりとて、ことに秘藏して嫡々に譲しかば、悪源太にこそたぶべかりしを、三男なれ共、頼朝は末代大将とぞみ給ひけるにや、頼朝にたびけり。<sup>三</sup>

それが時代が下つて『平治物語』流布本「源氏勢汰への事」となると、

さて鬚切と申は、八幡殿、貞任・宗任をせめられし時、度々にいけとる者千人の首をうつに、みな髭ともにきれければ、髭切とは名付たり。奥州の住人に文寿といふ鍛冶の作也。昔

より嫡々に相伝せしかば、悪源太こそつたへ給べきに、三男なれ共、頼朝さづかり給けるは、つるに源氏の大将となり給ふべきしるし也。<sup>26</sup>

このように鍛冶「文寿」の名が増補されていることがわかる。こうした増補の典拠となった可能性が高いのが刀剣伝書である。

「文寿」という鍛冶の名を刀剣伝書にあたってみよう。現存するなかで最も古いとされる『観智院本銘尽』<sup>(27)</sup>(応永三十年(二四三三年)書写の奥書有)時代別の項、大宝年中には、

文寿 むつの国住人けんしちう代ひ□き□

といふ太刀のつくりなり

とあり、同じく「剣作鍛冶前後不同」の項には

諷誦 ひけきりお作

とあるのがみられる。『鍛冶名字考』(享徳元年(一四五二年)の奥書有)にも似たような記事があり、

諷誦 平家二小鳥ト云太刀作者也コノ小鳥ハカマクラノ法華堂厨子ニコレヲサメラル又切居ト云太刀ノ作者トモ云ヨロイ武者ヲキリスヘケルユヘニキリスヘト名付タリ又源氏重代ノヒケ切ノ作者シラスト云ヘトモ実ニハ諷誦之作ト云々

となつてゐる。文寿のほかには諷誦という名がみえるが、この文寿をブンジュと読めばフジュに音が近くなる。仮名表記で「ん」を書かないこともあるので、仮名で書けば両方とも同じ「フシユ」となることになり、この両者は同一人物を指すと考えられる。すると『観智院本銘尽』も『鍛冶名字考』の記述もだいたい同じ系統にあるものと思われる。『平治物語』にはこのように刀剣伝書

からの影響と思われる増補が見られることから、刀剣伝書は文学作品にも影響を与え得る存在だったことが言えるであろう。剣巻もこうした刀剣伝書の流行を背景に生まれたものと考えられないだろうか。

剣巻は源氏の刀剣伝承に神話を取り合わせる形で形成されており、本としての傾向は、刀剣の由来やその靈威を述べて刀剣の価値づけをする刀剣伝書に近い。こうした刀剣への興味の盛り上がりや背景に剣巻が生れてきたのだとすれば、その成立は刀剣への興味が増大する南北朝以降となるであろう。

また、剣巻が作られ流布していった南北朝・室町期は、術学的傾向の強い時代でもある。『太平記』は物語の本筋から逸脱するほどに古今東西の故事を引き、『曾我物語』仮名本では曾我五郎と母とが大量に仏典を引用し論争する。こうした知識への欲求が特定の器物に対して「名物」をあつめた本を生み出す元ともなっているのだろう。剣巻では熱田に関わる神話が大量にとられているが、それは熱田と作者との関わりというよりは、草薙剣に関する知識を余すところなく披露しようとした結果であると考えたい。草薙剣の伝承を集めれば、自然とそれを奉斎する神社の伝承が多く入り込むであろう。刀剣にまつわる知識の幅広さもそのような術学趣味を背景にしていると思われる。

### 三、剣巻の時代性

剣巻には時代を反映しているとみられる記述がある。まずは、安徳帝とともに海に沈んだ宝剣を複製であつた、とする記述であ

る。

……代カ世ニテ有程ハ、カクコソアリケレ。後ノ宝剣モ靈驗劣リ給ハス。平家取テ都ノ外ニ出テ、二位殿ノ腰ニサシテ海へ入給ヘトモ、上古ナラマシカハ、争カ失スルヘキ。末代コソウタテシケレ。カツギスル海士仰セテ是ヲ求メ、水練スル者共ヲ入テ尋シカトモ見ヘス。竜是ヲ取テ竜宮ニ納テケリ。

終ニ不出來。(中略)……八俣ノ大蛇ト其体ヲ示サンカ為ニ、八歳ノ帝頭レテ、本ノ劍ハ叶ハネハ、後ノ宝劍ヲ取持テ都ノ外ニ出テ、西海ノ波ノ底ニソ沈ミケル。「終ニ竜宮ニ納マリヌレハ、叶ヘキニ非ス」トソ、人ノ夢ニ見タリケル。

宝劍の複製については古く「古語拾遺」から言われてきたが、それが壇ノ浦での宝劍の紛失と関連付けて言われるようになるのは南北朝期、特に北畠親房の『神皇正統記』に「……宝剣モ正体ハ天ノ叢雲ノ劍(後ニハ草薙ト云)ト申ハ、熱田ノ神宮ニイワヒ奉ル。西海シツミシハ崇神ノ御代ニオナジクツクリカヘラレシ劍也。ウセヌルコトハ末世ノシルシニヤトウラメシケレド、熱田ノ神アラタナル御コト也。」と書かれて以降である。親房が神道説を述べるのに巷間の説話を引用する可能性は極めて低いため、彼が劍巻を参照したとは考えにくい。すると、親房の説と同じ内容をもつ劍巻は、南北朝以降に成立したと考えられよう。また、劍巻では源氏重代の劍が、改名を繰り返しながら嫡流に相伝されていく構成になっているが、そこには足利氏の影響がみられる。例えば「鬼丸」という太刀についてである。

……綱ハ兼テ心得タリケレハ、少モ不驕、此料ニコソ持タル

劍ナレハ、帶タル鬚切ヲサト拔テ、空様ニ鬼ノ手ヲ切ル。キリハツレハ、綱ハ北野ノ社ノ廻廊ノ上ニ動トソ落タリケル。鬼ハ手乍被切、アタコノ山ヘ向テ飛行クコソ怖シケレ。(中略)サテ此鬚切ヲ、鬼ノ手ヲ切テ後、名ヲ改メテ鬼丸ト名ツク。

以上は劍巻の「鬚切」という太刀が「鬼丸」と改名される話だが、ここでは渡辺綱が一条戻り橋で鬼を切ったことにちなんで「鬼切」と名づけられている。「太平記」<sup>(30)</sup>にある同じ「鬼丸」という名の太刀の由来は、劍巻とだいぶ異なったものになっている。「太平記」では、北条時政が夜な夜な小鬼に苦しめられていると、ある夜、太刀の精が夢枕にたち、穢れた手でさわったため刀が錆びてしまっているのを身を清めた人に刀の錆をぬぐわせるように告げ、時政がそのとおりにして刀を立てかけて、火鉢にふと目をやると、火鉢の台に銀細工の鬼がはめ込まれているので、夢に出てきた鬼に似ていると思つて見ていると、立てかけておいた太刀がひとりでに倒れ掛かつてその鬼をきった、という話になっている。これでは鬼丸は源氏の重代ではなく北条氏の太刀だったことになる。こうした伝承の違いを考えるため「観智院本銘尽」をみてみると、

助綱 あわた口、ほうくわうし殿御代めし下されおに□作り、太刀刀ともにまれ也大きりやすり、かまく□のくろまをうち、とうさこんとかうす正和五年までは百卅年也

とあり、鬼丸を北条氏の太刀だとしている。「観智院本銘尽」で



は「ほうくわうし殿」、つまり最初の所有者を時宗としているが、北条氏の太刀であるという部分は「太平記」と同じである。

「観智院本銘尽」は書かれた時代の異なる複数の章からなっており、慎重な判断を要するとはいへ、鎌倉後期に遡れる要素もっている。この内容も慎重に扱わねばならないが、「太平記」が最初の太刀の所有者を時政としているのにたいし、伝説的人物にまで遡らず時宗としているところなど、「太平記」の影響を受けたとも言いつれない面がある。以降、刀剣伝書の世界では最初のも所有者が時頼で、国綱という鍛冶の作った北条氏の太刀であることが定説となつていくが、つまり、鬼丸という太刀が北条氏の物であつたことは有名なことだつたと思われる。剣巻はそれを頼光が鬚切を改名したものとしているが、それは鬼丸という刀剣の由来を、北条氏の重代から源氏重代へ書き換えることである。

同じことが「小鳥」という太刀についても言えよう。「平家物語」にも名前の見える小鳥の太刀は有名な平氏重代の太刀だが、剣巻ではそれを

……責テノ余ニヤ、重代シテ持タリケル一具ノ劍ヲ取放テ、  
吠丸ヲ掣引出物ニソシケル教真別当此劍ヲ得テ、「是ハ源氏  
重代ノ劍ナリ。教真力可持劍ニ非ス」トテ、権現ニ進テケ  
リ。為義一具ニテ持タリケル劍ヲ引放タリケレハ、片手無様  
ニソ覚ヘケル。無心元マ、ニ、吉鍛冶ヲ召シ登セテ、獅子ヲ  
本ニシテ、「少モ不違作」トテ造ラセタリケルカ、殊勝ノ劍  
ナリケレハ、喜事不斜。目貫ニ烏ヲ作りテ入タリケレハ、小  
鳥トソ名付タル。

と、為義が作らせた太刀としてしまつてゐる。このような刀剣伝書などの記述から、剣巻に名称があらわれる刀剣は、当時すでに名剣と呼ばれるような品々であつたことが想像できる。こうした当時の名剣をすべて源氏重代の太刀の名として物語に組み入れていく、という傾向がみられることから、剣巻には源氏を称揚する姿勢があると見えよう。それは南北朝期の足利氏の台頭とも無関係ではないだろう。そうすると、剣巻の成立はやはり南北朝を遡らないと言えるだろう。そしてその成立の下限は、屋代本の書写年代が応永頃とされていることや、長祿四年には単独で流布する剣巻（長祿本平家剣巻）がみられることなどから、室町初頭を下らないと言えそうである。

#### おわりに

以上、剣巻の生成にかかわる文化的背景をみてきた。近年、神道説の側からの検討が盛んにおこなわれ、熱田の伝承と関わりが深いと言われてきた剣巻だが、熱田の伝承との関わり方には、「熱田系」という言葉の示す範囲も含め、再考の余地があることを指摘した。また、南北朝、室町という時代のなかで刀剣への興味関心が増大し、刀剣伝承が流行したという事実は剣巻の生成を考へる際に看過してはならないと思われる。現在、刀剣伝書に対する文学側の調査・研究は始まつたばかりであり、まだ不明なことが多いが、刀剣伝書が、剣巻とその他の軍記などの間で伝承が混乱しているといわれているものについて、考察の手がかりとなることは確かであろう。今後、剣巻の研究には、諸本間の比較検

討に加え、このような資料も検討していくことが必要である。

- (1) ここでは屋代本に付属、または百二十句本の章段に組み込まれて、または単独で流布した「剣巻」をいう。伝本等は、松尾葦江氏「平家物語剣巻 解説」「平家物語」四 完訳日本の古典 小学館 昭和六年 に詳しい。なお、以降引用は屋代本付属の剣巻による。
- (2) 伊藤正義「熱田の深秘——中世日本紀私注——」【大阪市立大学 人文研究】三九の一 昭和五五年三月
- (3) 小島鉦作・井後正晏「熱田」神道大系 神道大系編纂会 一九九〇年 製作された年代などは本書の解題によった
- (4) (3) に同じ 正確な製作年代などは御伽草子であるため不明
- (5) 「度会神道大成」前編 大神宮叢書 臨川書店 一九七六年
- (6) 名古屋市鶴舞中央図書館蔵本 調査はマイクログラフ資料によった
- (7) (3) に同じ
- (8) (3) に同じ これは神宮寺で作成されたと思しい、神仏習合思想の色濃いものである。
- (9) 佐成謙太郎「謡曲大観」明治書院 一九八二年
- (10) 表章・月曜会「世阿弥直筆能本集 影印篇／校訂篇」岩波書店 一九九七年 引用の際には校訂篇を参照した。
- (11) (3) に同じ 「熱田宮秘釈見聞」は中世における本地垂迹説に基づき、熱田神宮の本地を解説したものである。当時広く読まれたものらしい。
- (12) 「諸縁起」奥書に「別当法印権大僧都幸清撰 建保七年己卯閏二月廿五日書了」とある。高橋啓三「縁起・託宣・告文」岩清水八幡宮資料叢書二(非売品) 昭和五一年 所収 また、八幡縁起の影響については阿部泰郎「八幡縁起と中世日本紀——「百合若大臣」の世界から——「現代思想」二〇巻4号 一九九二年、原克昭「源大夫説話」とその周辺——熱田をめぐる中世日本紀の一齣」

【説話文学研究】三三号 一九九七年六月 に言及がある

- (13) (3) に同じ
- (14) 小林芳規・武石彰夫・土井洋一・真鍋昌弘・橋本朝雄「梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡」新日本古典文学大系 岩波書店 一九九三年
- (15) 「其後新羅国の僧日羅といひし者。此剣をほしがり。彼宮に參籠日久し。可然便宜をもて。御殿をやぶり。既にぬすみとり。にげ行と思へば宮中を一夜のほどめぐるばかり也。夜のあけたれば。かなはずして剣をすて、にげぬ。其道をけんかい白はさふといふ。又は剣返しともいふ。依て同寸尺太刀を七ふりうたせて同殿に置給ふ。以上八ふり也。是を八剣と云。」とある。出典は「統御書類従 三下」
- (16) 「実宝剑わ熱田宮に坐。むかし新羅国依道行ト云法師渡テ宮ニ參籠シテ此剣ヲ盗取テ。筑紫まで行ケケルカ。風落浪荒テ船出ヤラズ。道行。御劍吾国ヲ不出トノ御事ト知食テ。此剣ヲ熱田宮ヘ返し。宮人に相テ曰。「吾曰「我唐土法師也。御門日本州ヲ打トテ。相者召占形尋賜。熱田ト云所に劍有。彼有覽程わ不協ト申。此劍ヲ取ヘシト来。已筑紫まで行ユ。船出すして帰らぬ。重人來事も可有ト云婦賜。其後七字移鑄相セヘ置賜事本體隠ためぬ。亦出雲八雲義を残すとかや。仍八剣ト号。」とある。出典は(5)に同じ
- (17) 「……自左相府晚食可令用意之由命之間、西刻計能向。予、滋野井中納言、姉小路前宰相、師富朝臣等諸伴、清談及夜景、彼重代太刀此太刀、実家公旧都月見之時帶之。取落之処、浮水之間号千鳥云々。無銘、小鍛冶作云々、并自慈照院殿拜領之太刀国友藤林等各見之、有興々々」 統御書類従完成会「実隆公記」太陽社 一九五九年
- (18) 「……夜來織田安芸入道殿初來臨。持以一纏。有小宴。明叔茂叔在座。信上可話言。先年於大殿之第、有酒宴。吉見三郎殿廿一歳殺陶中書。内藤彈正当座殺吉見。々々所持之刀七寸五分名之曰鶴嚙。昔彼先祖河狹之時墮此太刀於大河中。失却三年後又使鶴之時 鶴含

此刀自水底上。故名之。彼重代也。以故自大内方贈於吉見家。一時之談柄也云々。『竹内理三』『藤涼軒日録』増補資料大成第二三巻

臨川書店 一九八六年

(19) 『統群書類從 補遺三』

(20) 「亡母年忌持齋看經如例。於宝殿院仏事執行。夜持経參。累代太刀天狗切入見參。未見之間一覽有志之由兼令申。仍入見參。此太刀預他所可粉失之間。三條召出取云々。累代家重宝也。可成他物之様無念事也。」とある

(21) 「劍などを御覽じ知事さへ、いかで習はせ給へるにか、道の者にもや、まさりてかしくおはしませば、御前にてよきあしきを定めさせ給ふ」『増鏡』第二「新島守」

(22) 石川松太郎『往來物大系』第五巻 大空社 一九九二年

(23) ここでは刀劍鑑定にまつわる総合的知識を纏んだ書物のことをさす。

(24) 『古道集 一』天理図書館善本叢書 和書之部 第七二巻の一 八木書店 一九八六年 ここで引用した話は劍巻や仮名本『曾我物語』などに類輪がみられ、これらの伝承を、間接的にはあろうが、撰取している可能性はある。

(25) 水積安明・島田勇雄『保元物語・平治物語』日本古典文学大系

岩波書店 一九六一年

(26) 『(25)の付録による

(27) 国会図書館蔵 調査は昭和十四年の複製によった

(28) 岩佐正・時枝誠記・木頭才藏『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系 岩波書店 一九六五年

(29) 鶴巻由美「劍巻」の構想と三種神器譚『国学院大学大学院紀要 文学研究科』二五号(一九九四年三月) 所収にも同じ指摘がある。

(30) 後藤丹治・釜田喜三郎『太平記 二』日本古典文学大系 岩波書店 一九六一年

(31) 『鍛冶名字考』では「国綱 藤六左近入道鎌倉西明寺入道時山内住道崇剣鬼丸作真国ト銘ヲ打云々」「国綱 本ハ粟田口ノ住西明寺禪門ノ時山内住、時代は下るが寛政四年の『古刀銘尽大全』では「鬼丸 京 国綱 西明寺入道殿太刀平相模守時類太刀ト云」とあり、寛政七年の『本朝鍛冶考』でも「国綱 鬼丸 順徳天皇建保承久栗田口国家六男後鎌倉山内住藤六左近将監北条時頼太刀鬼丸作者」となっていて、鬼丸は北条氏の太刀という扱ひである。

(32) 『平家物語』巻二「無紋の沙汰」に「少将、これは当家に伝はる小鳥と云ふ太刀やらんと、嬉しげに見給へば」とあり、『平治物語』にも「左衛門佐しけもり生年二十三、あかちの錦のひた、れに、はじの匂の鑑に、てうの丸のすそ金物しげくうたせたり。龍頭の甲の緒をしめて、小鳥といふ太刀をはき、切生の矢をい、しげとうの弓もつて、黄鶴毛なる馬に、柳桜をすりたる貝鞍をかせてのり給へり。」(金刀比羅本)とある。

(33) 鈴木雄一「重代の太刀——『銘尽』の世界を中心に——」『文学史研究』第三五号 大阪市立大学国語国文学研究室文学史学会 一九九四年十二月、鈴木彰「抜丸話にみる『平家物語』変容の一樣相——軍記物語と刀劍伝書の世界——」『国語と国文学』第七七巻八号 東京大学国語国文学会 二〇〇〇年八月 などがある。